

おいしいきのこ生産に 障害者もたずさわる

—ホクト株式会社（長野県）—

職 場
ル ポ



〔文〕清原れい子 〔写真〕小山博孝

取材先データ

ホクト株式会社

〒381-8533 長野県長野市南堀138-1

TEL 026-243-3111(代表) FAX 026-243-1680

Keyword：特別支援学校、ハローワーク、職場環境の整備

POINT

- ① 安全第一。『わかるだろう』という思い込みはやめ、大事なことは筆談で確認する
- ② 聴覚障害者のベテラン社員が、若手の指導役を務める
- ③ 障害者を積極的に採用するため、職場見学を受け入れる

WORKSHOP REPORT



広報・IR 室室長の前田哲志さん



赤沼きのこセンター所長の内山岳志さん

きのこひとすじに成長

JR長野駅から長野電鉄に乗り換えて十数分。沿線にりんご畑が広がるなかを走ると、朝陽駅に着く。駅近くに、きのこの総合企業「ホクト株式会社」の本社がある。「きのこひとすじ」とうたい、きのこの種菌開発や品種改良から、きのこの栽培・流通までを一貫して行い、ブナシメジ、エリンギ、マイタケ、ブナピー、霜降りひらたけの5品種を生産している。アメリカではブナシメジ、エリンギ、マイタケ、ブナピーを、マレーシアと台湾ではブナシメジ、ブナピーをと、海外にも拠点を置く。

ホクトの創業は1964（昭和39）年。食品包装資材の販売からスタートして、きのこ栽培用ボトルの製造を開始し、1983年にきのこ総合研究所を設立、1

989（平成元）年に本格的にきのこの生産を始めた。広報・IR室室長の前田哲志さんに会社の理念を聞いた。

「私どもは、食の安全にこだわって、お客さまに安心かつ安全なものをお届けできていると自負しております。きのこの培地は植物由来の原料でつくり、農薬を一切使わず、衛生管理を徹底して、菌を植えてから出荷するまで、ほとんど人の手を触れずに行っています。殺菌はもちろん、異物混入も起きないような体制をしき、外部の第三者機関に定期的に検査も依頼しています。また、高品質なきこの生産を旨として、栽培技術の研究も重ねています。今日まで1年1工場ペースで建設し、順調に業績も伸びてきました」

1995年に、エリンギの本格的な栽培と販売を開始。世界で初めて量産化に成功し、大ヒットした。

「どの工場でも、生産基準は一緒で、基

本的に1工場1品種をつくっています。10月、11月が一番の繁忙期で、圧倒的に秋から冬にかけてよく売れます。新しく発売された「霜降りひらたけ」は、ホクトオリジナルのきのこですが、食べていただくと呼びたいですね」

研究開発↓生産↓配送↓販売の一貫体制のなかで、生産機能をになっているのが、北海道から九州まで全国19拠点31工場の「きのこセンター」だ。センターでは、研究所でつくられた原菌から種菌をつくり、さまざまな原料と水を混ぜ、きのこの栄養源となる培地をつくる。培地をビンに詰め、殺菌後に種菌を植えつけて培養室へ。きのこの菌に刺激を与えてから、生育室で大きくなるまで育てていく。育てたきのこは、「地産地消」をモットーに、それぞれのセンターから新鮮な状態で消費者のもとへ届けられる。その生産に障害のある人たちもたずさわっている。

ホクトの従業員は約4000人。障害者雇用率は、2・52%。今回は、本社から北東方向へ車で走ること約十分。「赤沼きのこセンター」で、障害者雇用の取組みを聞いた。

大事なことは、筆談で伝える

2006年に稼働した「赤沼きのこセンター」では、エリンギを1日10万パック生産する。1996年に入社した所長



エリンギの生産をする「赤沼きのこセンター」



ボトルで栽培するエリンギ

の内山岳志^{たけし}さんは、きのこ総合研究所、広島きのこセンター、きのこ総合研究所、長野市青木島きのこセンターと勤務して、2年前に現職に就いた。

「きのこは生きものですから、とてもデリケートで、温度が1度違うだけで、うまく伸びなかつたりします。季節や天候によって環境は変わるので、機械の設定を調整したり、メンテナンスも必要です。衛生面においては薬剤を使えないので、生育室はきのこを収穫するたびにすべて手作業で拭き掃除をしています。エリンギは、ほかのきのこ生産と違い、ほとんどの工程は自動化していますが、重量をそろえるため、一部を手作業で行っています」
赤沼きのこセンターは従業員160人。工場の障害者雇用率は3・2%で、聴覚障害者3人、身体障害者1人、知的障害者1人が働く。

「聴覚障害のある3人は詰込みを担当しています。きのこをボトルで栽培して、きのこを取った後に出る廃培地^{はいばいち}や、工場の掃除などの作業が中心です。カラになったボトルを次の栽培のために積む作業、機械の清掃や、検品といって機械が正しく動いているかどうかの確認の補助をしています。そのほか、荷物の積み上げと積み下ろしをしています」

肢体不自由者はきのこを取った後の廃培地を配達するトラックの運転を、知的障害者はできあがったきのこの製品を冷

蔵庫に保管する作業を行っている。内山さんは、これまでも障害のある人たちと一緒に働いてきた経験がある。

「私が入社した20年前、すでに研究所では、障害者が働いていました。研究所は規模が小さいだけで、きのこセンターと行っていることは同じですので、きのこをつくる工程の機械の掃除や補助をしてもらっていました。一番多くいたのは聴覚障害の方だったのですが、かつて勤務していたところで労働災害を起こしてしまいました。大きな機械はすごい音がしますが、聴覚障害の方は音が聞こえないため、機械に対する恐怖心がなく、機械に近づいてしまった。そういうところを注意しなければいけないと勉強させられました」

詰込み現場には、産業機械がたくさんあるため、大事なことは必ず筆談で確認している。

「『わかるだろう』という思い込みはしない。絶対に筆談で伝えるようにしています。本格的に手話を勉強したわけではないので、重要なことの意味疎通に関しては筆談をすることがポイントですね」

全国のきのこセンターごと に障害者を雇用

障害者の定着はよく、聴覚障害者の2人は勤続10年を超える。

「勤続10年を超える2人のうち、1人

は定年を過ぎ、再雇用をしています。この2人のほかにいるあと1人は若手です。たぶん、パツと見ても、どの人に障害があるかはわからないと思います。普通に仕事ができますし、聞こえる人より仕事ができる場所もありますから。会社の忘年会にも出てくれますし、大きな分け隔てはないと思っています」

待遇は、地域限定社員。雇用条件は、聴覚障害者、肢体不自由の人たちは健常者と同じだそうです。

「聴覚障害の方は研究所、青木島きのこセンターにもいましたし、聴覚障害の方たち同士、『この人知っているよ』というつながりがあります。細かく把握はしていませんが、多くのセンターではこのことと同じような部署で聴覚障害の方が働いていると思います。それぞれの現場では手話を取り入れたり、レクリエーションに参加するように声をかけたり、働きやすいようにコミュニケーションに配慮していると思います」

単にきのこをつくるだけならむずかしくはないが、安定的につくるのはむずかしいのだそうだ。「きのこの声に耳を傾け、些細な変化^{ささい}に気づいて、すぐに行動に移せるか。生産では気づきが大切」と、内山さんが話を続ける。

「現場に責任者がいますから、障害者たちと直接やり取りすることも少なくなっています。詰込みの職場では、聴覚障

WORKSHOP REPORT



宮崎さんとともに現場で働く川浦祥悟さん（左）と星野洋さん（右）。
2人にとって宮崎さんはよき先輩だ

害の方たちが若い人たちの先輩社員です。一緒に働く人たちは簡単な手話をマスターして、コミュニケーションを取るようになっています」

「尊敬できる先輩と手話、ジェスチャーでコミュニケーション」

同じ職場で働く若手社員2人に話を聞いた。

聴覚障害者3人が働く詰込みの部署に、川浦祥悟さんが昨年、星野洋さんが



原料投入の作業をする宮崎さん（左）と川浦さん（右）

今年入社した。2人とも聴覚障害者と接したのは初めてだった。

「1年目は、宮崎さんとかかわる機会が多かったです。入社したときは、通じ合えるのか不安なところがありました。でも困ったとき、仕事がわからないときにたくさん教えていただきました」と川浦さん。宮崎さんとは、後に登場する聴覚障害のある宮崎孝治さんのことだ。

「サポートしていただく宮崎さんは先輩です。最初は手話が全然わからず、壁

を感じてしまったのですが、言葉が通じなくても気にかけてくださいました。だから、コミュニケーションが取りやすくて、冗談も通じて笑いあったりもするの
で、距離が近い気がします」と星野さん。
2人とも、日常で使う簡単な手話ではできるようになった。星野さんは、「時間、人の名前などは先輩たちに聞いたり、直接、聴覚障害の方に教わったりして覚え
ました」

川浦さんは、「最初、簡単な手話をみなさんから教わって、自分の名前はこういうふうに表すのだとわかったときは感動
しました。伝わるよきの達成感が素晴らしいです。手話がわからないときは、ホワイトボードに書いたり、身振り手振りで
伝えると、聴覚障害の方もわかってくれるので、コミュニケーションは取れています」

「お父さんというか、家族みたいです」と2人。先輩の仕事ぶりを尊敬し、休憩時間にはざくばらんに会話をしている。

「仕事は、ほかの人たちよりもがんばっているのがよくわかります。それを見ていると、負けてはいられないという気持ちになります」と星野さん。

「慣れている仕事でも、自分でもヒヤリとすることがあります。作業をするときに音が聞こえないとなおさら不便なことがあると思います、『大丈夫ですか？』と聞く
と、『大丈夫』と返ってきます。耳が聞こ

職場 ルポ

次々に仕事を進める
ベテラン従業員の宮崎孝治さん

えないというハンディキャップを感じないくらい、すごいです」と川浦さん。同じ職場で働くのは常時7人ほど。さわやかな青年2人の気持ちは、聴覚障害の人たちに通じているに違いない。

指導役として存在感を発揮

宮崎孝治さん（65歳）は、大手電子機器メーカーで働いていたが、工場縮小のため転職せざるを得なくなり、赤沼のこセンターの開設時に入社した。勤続11年。2017年に定年になり、再雇用で働き続ける。

「以前とはまったく違う仕事なので、機械の操作などを覚えるまでがたいへんでしたが、仕事には慣れました。重いものを持つことと、夏暑いことがたいへんですが、70歳までは働きたいです」

詰込みなど、さまざまな作業は、日々ローテーションで変わるといふ。通勤は、電車と自転車約30分。昔は野球選手で、ポジションはピッチャーだったので、体力には自信があるそうだ。現在は、長野ろう学校と同窓会会長としても活躍し、2019年の100年記念事業の準備に忙しい。「教えてもらって、とても助かった。お父さんみたい」と若手2人が話していた

と伝えると表情を崩し、「2人とも、がんばってやっていますよ」と答えてくれた。

詰込み部署で班長を務める小林智仁さんは、7年前に大町きのこセンターから転勤してきた。一番気をつけているのは、「安全に」ということだ。

「聴覚障害の方たちとは、一緒に仕事をしていくうえで、最初は壁を感じるかと思うのですが、健常者と変わらないと思います。」



班長の小林智仁さん（左）と話す宮崎さん（右）

3人とも真面目で、よくがんばってくれています。機械が多いので、ケガがないように気をつけていますが、1日の作業を安全に終わらせることが一番ですね」

小林さんは、宮崎さんとのやりとりを、筆談ボードを手にも紹介してくれた。

「手話も少しはできるのですが、意見がうまく伝わらないことがあったり、朝礼も全部伝えきれないことがあります。コミュニケーションがきちんととれているのか心配なところは、文字で書いています。宮崎さんには、若い人たちの指導役を務

WORKSHOP REPORT



製品チェックをする、聴覚に障害のある福田航さん（21歳）
わたる



コンテナなどの洗浄作業を担当する、聴覚に障害のある有賀透さん（55歳）

ホクトの社是は、「5つの満足」。消費者・取引先・地域社会・株主・社員、すべての人の満足をとうたう。きのこセンターの従業員の採用は各所長に任されている。内山さんは「障害者を積極的に採用していきたい」という。

「職場見学も受け入れていますが、昨年、特別支援学校の作業を見学する機会がありました。机の上の作業に特化したら、障害がある人のほうが集中力のあることを見せられて、『われわれももっと積極的に考えなければ』と感じました。今月もハローワークから入社希望の人がきますので、まず見学してもらいます。すでに知的障害者が別の仕事に変わったので、その部署で採用することも検討して

今後、 障害者を雇用したい

めてもらっています」

休憩時間には、野球の話で盛り上がるという。

「ジェスチャーやわれわれの口の形を見て、何を話しているかをわかってもらっているところもあります。父親と同じぐらいの年齢なので、私も父親に接するようになりますが、宮崎さんと話をし、どうするかを決めていきたいと思っています」

聴覚障害の人たちが定着しているのは、きつと働き心地がいいからだろう。

「今後は、これまでのように、1年に1工場」という需要の伸びはむしろかしらうだと前田さんは話す。

「これからも、おいしさと健康にこだわり、きのこをつくりたいです。霜降りひらたけのほかに、新たにシイタケをつくりたいと考えています。市場の需要以上に新しい工場をつくると、価格が下がってしまいます。農家さんが高齢化して生産をやめて生産量が減ったときには、新たな工場を検討するかもしれません。そのときは、同じように障害者を雇用していくと思います」

ヘルシーで健康によいといわれる「きのこ」。その生産の一翼を、障害のある人たちがなっていた。



職場の壁には手話カレンダーが掛けられている